

第2章 調査の方法と概要

I. 質問紙調査

<調査対象者と配布・回収>

女子大学を含む全国 21 の大学・短期大学の男女学生 3,587 人に対して、調査協力を依頼した教員を通じて調査用紙を配布した。調査対象者がゆとりをもって回答し、またより多くのデータを回収できるよう、原則として関連授業時間内の実施、回収を依頼した。回収数は 3,382 部 (94.3%) (女子学生 2,694 部、男子学生 688 部) であった。

<調査時期>

2002 年 6 月から 11 月

<調査に関する倫理的配慮>

本調査は、セクシュアル・ハラスメントという個人的で微妙な問題を扱うため、その方法には細心の倫理的配慮が求められた。海外の先行研究が示すように、調査自体が被害者の経験を追体験させ、二次被害を引き起こす場合も想定されるからである。

調査用紙の作成に関しては専門の弁護士に相談し、被調査者が質問に答えやすいよう、質問文の語句・表現などに配慮した。調査の実施にあたっては、調査の趣旨や任意協力であることを担当教員から口頭で説明してもらうとともに、調査用紙の保管期間なども含め、調査用紙の表紙にもその旨を明記した。また、記入した調査用紙は、記入者自身の手で封筒に入れ密封した後に回収する方法をとり、匿名性の保証と個人情報の厳守につとめた。さらに、授業時間外での実施の場合や、時間不足やその場で回答しにくかった回答者が調査用紙を持ち帰って記入した場合には、郵送で返送できるようにも対応した。

<調査内容>

質問紙調査は、以下の 4 部から構成されている。

第 1 部 (問 1～問 9) は、被調査者のフェイスシートにあたる部分で、回答場所 (問 1)、性別と年齢 (問 2)、所属大学種別 (問 3)、現在のスポーツ組織所属状況 (問 4)、現在のスポーツ実施状況 (問 5)、卒業した学校種別 (問 6)、過去の運動部・スポーツクラブ所属状況 (問 7)、アルバイト経験 (問 8)、ボランティア経験 (問 9) をたずねている。

第 2 部 (問 10) は、日常の学校生活 (体育の授業や運動部活動時を除く) やアルバイト、ボランティア活動などの場で、男性の指導者や上司、仲間が女子学生に対しておこなう 19 項目の行為について、その認識と経験をたずねた。質問は以下の 3 つの観点からなされた: その行為をセクシュアル・ハラスメントと認識するかどうか (質問 A)、見聞きしたことがあるかどうか (質問 B)、受けたことがあるかどうか、ある場合には加害者とその行為にどのように対処したか (質問 C)。質問 A について

は、「そう思う」「どちらかというと思う」「どちらかというと思わない」「そう思わない」の4段階で評価を求め、「わからない」の項目を加えた。

第3部(問11)は、学校の体育の授業や運動部活動、サークル活動、地域のクラブなどスポーツの場で、男性の指導者や仲間が女子学生に対しておこなう19項目の行為について、問10と同様の3つの観点から、その認識と経験をたずねた。

問10および問11で用いた19項目については、スポーツに特有の場面設定を用いた Volkwein ら (Volkwein et al, 1997) の27項目を参考にしつつ、日本の文化的土壌において現実的に生じうる行為を設定する必要から、日本のキャンパスにおけるセクシュアル・ハラスメント調査(渡辺ほか、1997)を参考にして作成した。19項目は以下の通りである。

- 1) 性的な関係をしつこく迫る
- 2) 容姿やスタイルなど身体的な特徴を話題にする
- 3) 性的ないやらしい言葉や冗談を交わす
- 4) 性的な経験や性生活について質問する
- 5) 性的なうわさを流す
- 6) 「女性のくせに～」 「女だから～」 などという
- 7) 「おばちゃん」「ねえちゃん」など人格を認めないような呼び方をする
- 8) 性的ないやらしい写真や雑誌などを見せたり読んだりする
- 9) からだをじろじろ眺め回す
- 10) 食事やデートにしつこく誘う
- 11) 性的な内容の電話や手紙、メールを送りつける
- 12) 仕事や活動中(指導中)に腕や肩などにさわる
- 13) 仕事や活動中(指導中)に背中や肩をマッサージする
- 14) あいさつや励ましのためにからだをさわる
- 15) 特定の人物だけに個人指導をたびたび行う
- 16) お茶くみ、掃除、私用などをさせる
- 17) 女性の仕事(スポーツ)や活動の業績・実績を低く見る
- 18) カラオケや飲み会で、お酌やデュエットなどをさせる
- 19) 旅行や遠征、合宿先で自室に呼ぶ

上記のうち、12)、13)、17)に関しては、問10(スポーツ以外の場)と問11(スポーツの場)とで、それぞれの状況にあわせて文言を替えている。

第4部は、自由記述とし、実際に被調査者が受けたセクシュアル・ハラスメントの内容や、セクシュアル・ハラスメントに対する意見などについて、さしつかえない範囲での回答を求めた。

<分析方法>

本調査では、女子学生のセクシュアル・ハラスメントに関する認識と経験を、スポーツの場におけ

る体育系の学生と、それ以外の場における一般学生とのあいだで比較検討することを目的とした。

分析対象は回収した 3,382 部のうち、女子学生 (2,694 部) で、体育群 (940 名：体育：スポーツ・武道を専攻) と一般群 (1,392 名：体育・スポーツ・武道・健康系以外の学部・学科を専攻) の 2 グループ (合計 2,332 部) を抽出し、認識および経験を比較検討することとした。

この質問紙調査に関して、調査対象者の属性については第 3 章で、数量的分析結果については第 4 ～ 6 章で、自由記述の質的分析に関しては第 7 章で報告する。

II. 個人／グループインタビュー

I で用いた質問紙調査のほかに本調査では、個人インタビューへの協力を求めた。協力依頼の方法については、調査グループへの連絡先 (メールアドレス) を明記した名刺大のカードをすべての調査用紙に添付し、同意してくれる協力者サイドから調査者に対して連絡をしてもらうかたちをとった。その際、現在セクシュアル・ハラスメントに遭遇している人が利用したり、そういう状況にある友人に対して助言ができるよう、全国 6 ヶ所の専門的なセクシュアル・ハラスメント相談窓口 (了解済み) の連絡先をカード裏に紹介し、個別に持ち帰って利用できるよう配慮した。

このメールアドレスに回答してくれた回答者は 8 名であったが、その後連絡がとれたのは 2 名のみであった。この 2 名に対して、インタビュー調査をおこなったが、結果的には実際のセクシュアル・ハラスメント経験に関する話を聞き取ることはできなかった。そのため、このインタビュー結果に関する報告はここでは省略する。

そのほかのインタビュー調査として、ふたつの女子学生グループ (各 3 名) による聞き取り調査をおこなった。サンプルは無作為によるものではなく、グループごとの属性は以下の通りである。

グループ X：体育系以外の専攻に所属する一般学生で、中学校時代の運動部活動経験者は 2 名、現在は 3 名ともスポーツ活動をしていない。3 名とも所属する大学で女性学あるいはジェンダー学関連の授業を受けた経験がある。

グループ Y：体育系の専攻に所属し、いずれも中学校、高校の少なくともどちらかあるいは両方で運動部活動経験があり、3 名とも現在も活動中。3 名のうち 2 名は女性学あるいはジェンダー学関連の授業を受けた経験がある。

グループ X に対するインタビューは 2004 年 1 月 26 日に、グループ Y に対するインタビューは 2004 年 3 月 17 日に、それぞれの学生が所属する大学にておこなった。

被調査者に対しては、あらかじめ文書で本調査の趣旨と目的、匿名性の保証と守秘義務に関する約束ごとを説明し、データ利用の際に当該箇所の掲載文面について本人の確認をとることを述べ、了解を得た。

調査は半構造的インタビューによっておこなわれ、被調査者はあらかじめ本調査で用いた調査用紙の問 10 と問 11 に答えるよう求められ、各自でそれに回答した後、グループでのインタビューに応じた。被調査者はまた、女性スポーツ指導者と監督の関係について書かれた雑誌記事 (Asahi Shimbun Weekly AERA, 1998) を事前に読むことを求められ、記事内容に沿ったインタビューに応じた。

このグループインタビューの結果は第8章で報告する。